

謹んで新年のお祝いを申し上げます。

元旦の朝は素晴らしい天気でした。毎年我が家の老犬と一緒に散歩する元旦の朝ですが、今年は快晴の空のもと、近所の小高い丘から富士山がくっきり見えました。元旦の朝に富士山を拝めることは、(歳を取りましたせいか)日本人を感じる瞬間と思っています。

皆様はどのような新年を迎えられたのでしょうか。

小生、このお正月にもうひとつ幸せを感じた時間がありました。それは、フランスの大文豪のビクトル・ユーゴーが還暦に書き上げた「レ・ミゼラブル」のミュージカル映画を観た時です。昔、ロンドンに4年ほど住んでいましたので、キャメロン・マッキントッシュ演出のミュージカルを随分観ました。「オペラ座の怪人」や「ミス・サイゴン」等の傑作もありますが、特に「レ・ミゼラブル」が好きで、何度も観に行ったものです。果たして、あれほどの劇場ミュージカルがうまく映画になるのだろうかとちょっと心配しながら見始めましたが、さすがトム・フーパー監督の映画でした。

世代を超えて、老若男女がそれぞれの楽しみを味わえる映画ですが、粗筋は次のとおりです(内容をご存知な方は、文章が長いので飛ばしてお読み下さい)。

「貧乏のため、姉の子供達のために一切れのパンを盗んだジャン・バルジャンは約20年(正確には19年)も投獄されてしまう。仮出所の際に受けたミリエル司教の慈愛の心に触れ、その後は(名を替えて)更生し、事業でも成功して、とうとう市長まで登りつめる。りっぱな人生を過ごし、世間から尊敬されていたジャン・バルジャンの前に、仮出所で逃げている彼を執拗に追いかけている警部のジャベールが現れる。その後、ジャン・バルジャンとジャベールとの間で、執拗な逃走劇が繰り返されることになる。ジャン・バルジャンは、元自分の工場で働いていて、最後は娼婦にまで落ちぶれて死んでしまうフォンテーヌとの約束である、彼女の遺児コゼットの面倒を見ることになり、コゼットを立派な大人に成長させるために尽くす。時はフランス19世紀の市民戦争勃発時であり、ジャン・バルジャンは、コゼットが愛する、市街戦で負傷した共和主義者の青年マリウスを必死の思いで救出する。また市街戦の最中、非情な警部ジャベールも助けるが、ジャベールは、自分が追いつめ、苦しめた犯罪人ジャン・バルジャンの「人を許す慈愛の心」に触れ、法を守る正義(例えパン一切れであろうと盗みという不正に対しては罰を与えるという完璧な生き方)と自分を犠牲にする慈愛の心との葛藤で、自殺してしまう。コゼットとマリウスとの結婚を前に、役目を終えたと判断したジャン・バルジャンは自身の犯した罪をマリウスに告白して、二人の前から姿を消す。最後は、教会で死期が近づいたジャン・バルジャンの前に、二人が駆けつけ、二人に看取られながら生涯を終える」

マッキントッシュの演出ストーリーをベースにしていますが、その中で私が考えさせられた場面は山ほどあります。その二つをご紹介します。

ひとつは、市長として、市民に愛され、立派な仕事をしているジャン・バルジャンに、人違いの別人がジャン・バルジャンとして逮捕され、裁判を受けるという話が入ってきます。ジャン・バルジャンとしては、ここでその別人がジャン・バルジャンとして誤認逮捕され、投獄されれば、もう自分は過去と決別できる。そして、すでに市長としての名声も受けており、このまま社会に安住し続けることができる・・・でも、そうなればその別人は自分の身代わりとして過酷な投獄生活を強いられることになる・・・どうしたらいいのかと悩みます。

私はその時のジャン・バルジャンであつたらどうするか。皆さんがジャン・バルジャンであつたらどうしますか。ジャン・バルジャンはそこで自問自答し、「Who am I? (私は誰なんだ)」と叫びます。判断の価値基準となる「私は誰なんだ」という問いは、私の心にグサッと突き刺して来ます。この問いは、「私はどうしてこの判断をするのか」「私はこの選択でいいのか」・・・という根源的な問いを追求し続けることの大事さを教えてくれます。さて、ジャン・バルジャンはどうか。彼は、市長という名声、事業成功から産み出した富を捨て、その裁判所に出向き、「自分がジャン・バルジャンであることを自白した」のです。私も、果たしてジャン・バルジャン同様に自白の道を選んだらどうか。そして、皆さんはどうですか。

もうひとつは、共和主義者のマリウスがコゼットとの愛を自覚し、「革命を取るか、恋を取るか」と自問するところです。大義を掲げ、その大義のためであれば全てを投げ捨てるのか、それとも愛すべき人を守るべきか・・・私ならどうするかです。世の中には、大事なことは山ほどあり、その価値判断はその人毎に異なることでしょう。でも、その価値判断の基準をどこに置くかで人の生き方が変わってしまうのです。「国を守るためなら個人の犠牲は厭わない」のであれば、その「国」とはなんなのか。また、「家族を守るために昼夜を問わず働く」というのであれば、その「家族」とはなんなのか・・・等々、私はいろいろ考えさせられます。

だらだらと映画の話をしてしまいました。ただ、私たちは日々の生活の中で、様々な判断を下しております。その時の「判断基準は何なのか」ということを自問自答し続けることの中で、人生が見えて来るように思えます。

最後に、年末に誕生日を迎えた私の次女に、次のような詩を送りました。

「きみはどんな五重塔を建てるか」

長い年月にわたり風雪に耐えて立ち続ける古都の五重塔
自然災害の地震や雷 さらに人的災害の火災の難にも逃れて
寡黙な風情で その姿を強く訴えている存在感には
他を圧倒する美しさがある

きみのおじいちゃんは百歳を目指して、日々生きている
一層を二十年とすれば、おじいちゃんにはもうすぐ五層の塔が建つ
貧しさ、戦争での負傷、戦後の混乱期での四苦八苦の生活・・・
様々な思いで各層を築き上げてきたことだろう

やっと一層を築き上げたきみ
先は長いとも言える
或はあつと言う間に二層、三層と進むかも知れない
少なくとも言えることは その一層毎にきみの人生があることだ

そして 忘れてはならないことがある それは・・・
美しい五重塔には一本の心柱が通っていることだ
各層を貫きながら 建物本体とは繋がっていない柱があることだ

どんな世の中になっても 時代に流されることなく
これから押し寄せてくる苦難に耐えながら
四季折々の風情を表象する 美しい五重塔を築くかは きみ次第だ

さあ きみらしい 美しい五重塔を築け

この詩は次女のためと同時に、私自身のためにも書いたと言えるものです。還暦を越えた私に残された時間はそう長くはありません。私がこれから築く一層（20年間）をしっかりとしたものにするためにも、ジャン・バルジャンの心情を私自身の心柱にするほどの勇気を持って、毎日こつこつ過ごすことができればと思っています。

ここまで、お読みいただき、ありがとうございました。
引き続き、弊社サイモンズに皆様方の温かいご愛顧をお願い申し上げます。

平成25年元旦

株式会社サイモンズ
代表取締役社長
斉川 満

